

平成二十二年七月一日発行（毎月一回一日発行） 通巻八四六号

# 火星

平成二十二年七月号



七曜抄  
(七)

山尾玉藻

昼過ぎの鶏鳴とほる茅の輪かな

潮騒の闇に向きゐし茅の輪かな

梅雨冷の顔出し釣鐘饅頭屋

鮎生簀青き松葉のこぼれをり

水無月や木偶のお鶴は玻璃の内  
潮目読む眼差しとなる裸かな

島の子に見知らぬ日傘ばかりなり

とのぐもる草刈る音の出できたり

吾のこゑの吾を離れゆく木下闇

凌霄にアイロン掛けの男見え

# 太白星

柳生千枝子

二番鶏 三番鶏と朝寝して  
桑解かれ桑の一年始まれり  
桑解いて夕日の黄金に晒すかな  
音程の外れてきたり楓の芽  
月の暈恋猫のまた出てゆけり  
星宿の古墳にありし夜の東風  
春疾風記憶回路が少しへん

杉浦典子

麒麟舎に身長計あり雀の子  
たんぽぽの絮とぶ牛に仔の生まれ

水ぎはの杭までとんで雀の子  
藤棚の下に鳩ゐる雀ゐる  
水草生ふこの世をはなれゆく日数  
桜薬掃きよせてをりなななぬか  
葉桜のたしかこの角曲がるはず

浜口高子

砂肝を噛んで濃くなる夕霞  
鍵かけて桜の夜にまぎれ込む  
菜の花の黄のとぎれたり碍子鳴る  
花菜漬母の声せるあねいもと  
屈みたる膝きしみけり昼海月  
瀧に佇つ予後の眼をしぶかせて  
白日傘開き潮の香したりけり

# 火星作品

山尾玉藻選

かがまりし人に土筆の殖えみたり  
うなそこに貝の太れる春の暮  
野遊のはじめや鮠の水渡り  
わだつみは波を絶やさず更衣  
波寄するたび夏蝶の眩みけり  
春雨の黒谷にあるおもてうら  
春の雷インクラインの底歩く  
傘二本股挟みせし花見舟  
酒粕の炙れば焦げて西行忌  
み吉野の花の雲より糶売  
鮎食ぶ寄る舟べりの音さみし  
軍艦やたたみて振れる春日傘  
大桜の陰を離れて眩みけり

宝塚蘭定かず子  
神戸深澤 鱻  
宝塚山本 耀子

寂しさの谷底へ花降り込みし  
忍者失す伊賀田楽に舌焼いて  
胸はだけたるまま涅槃したまへる  
涅槃図の端に片膝立てし猿  
落椿闇退けてゐたりけり  
天仰ぐことなく甘茶仏立てり  
転けにけり甘茶の入りし紙コップ  
春雷や本に挿しある一信書  
ひこばえに餅明るく返りけり  
山蚕の葉に水音の逸りけり  
三日来て三日水尾引く春の鴨  
裏富士の肩やつれゐる涅槃かな  
草おぼる波打つてゐる鹿の腹  
花人になりゆくに靴えらびけり  
年寄りにたそがれなき初鯉  
朝桜馬穴に水のあふれぬし  
鹿の子の耳の水平五月くる

高松涼野海音

明石戸栗末廣

大和郡山城孝子

# 選のあとに

山尾 玉藻

波寄するたび夏蝶の眩みけり

蘭定かず子

漣が寄せる汀を「夏蝶」が舞っている。蝶は波が引く束の間を水に寄り、波が寄せると身を翻す。これを何度も繰り返す美しい景である。作者はそれを飽くことなく眺めていたのだから、岸を打つ波の煙きで蝶の姿が一瞬見えなくなる時があるのだろう。視線から蝶が消え失せる瞬間を「眩みけり」と描写して的確であり、大ぶりで鮮やかな「夏蝶」の幻想的イメージをも増幅させる。「眩む」は対象を見詰め続けねば得られぬ措辞。客観的描写に徹した見事な一元句。

春の雷インクラインの底歩く

深澤 鱧

「インクライン」は琵琶湖疎水の一部、蹴上から九条山への急勾配に三十石船を台車に載せて運んだレールが遺っている。レール敷きの石畳を辿って振り返ってみると、その勾配のきつさに改めて驚いたりする。作者もレールを辿りながら、明治の偉大な事業の軌跡を身を以って感じていたのだろう。「インクラインの底歩く」の底という意識には、知恵と努力の明治の人々に対する畏敬の念がある。その胸中を緩やかにひびく「春の雷」にそれとなく打ち出している。

寂しさの谷底へ花降り込みし

山本 耀子

作句の心得として感傷を露わにすることは極力避けたいが、掲句の「寂しさの」はどうであろうか。読み手は上五に影響されることなく、先ず中七、下五の景をこころに描いてみて欲しい。花びらが頻りに降り込む先の溪谷の深さや暗さが自ずと想像されるだろう。これがこの句のテーマである。そこで改めて上五「寂しさの」へこころを帰してみる。するとテーマである谷底まではかり知れぬほどの隔たりが感じられ、我々の興は一層奥深い世界へと誘われるだろう。この「寂しさの」は単なる感傷ではなく、対象を冷静に見つめた独自の観照なのである。

天仰ぐことなく甘茶仏立てり

涼野 海音

とりどりの花で飾られた御堂に付き、絶えることなく注がれる香水に身を輝かせ、灌仏会の釈迦像はいかにも瑞々しい。しかし、終始突っ立っているその姿に作者はふと哀れを覚えた。「天仰ぐことなく」とは、天は無論のこと、美しい花々さえ仰ぎ見ることもなく、身動きできない釈迦像を憐れむ思いである。灌仏会の釈迦像がいたいけなない誕生仏であり、この憐憫の情は作者の胸にごく自然に結ばれたものとして大いに共鳴する。作者の優しさが滲み出る一句である。(以下略)

# 恒星圈

小林成子

池の面にうぐひすの声はり付きぬ  
初蝶のやうなむらさき貝の殻  
仏生会啄める音 足元に  
落花かな市民プールに水満ちて  
交信の宙のあをめる桜の夜

金澤明子

坂口夫佐子

初花にこころ染まりて昏れにけり  
ゆるやかに動くファックス鳥曇  
夜の雷蓄の多きフリージア  
春寒の風のおつまるさくら草  
春場所の九重部屋に花菜風

蜜の糸きらりと引きし落花かな  
三楹の花の眠たき午前なり  
お文庫の扉あけたし花の冷  
灯りし錦市場や浅蜷鳴く  
浜風にスカーフほどく桐の花

木野本加寿江

城孝子

げんげ野に座す日傘より足二本  
上るたびシーソーに見え花大根  
帰るなりエプロンで立つ花衣  
美容院の椅子に花見の話など  
花山椒かくかく鳴れる顎の骨

吊られある絵馬読んでゐる花衣  
蟻の道はじめおはりの真直なり  
日永かな駅のホームに海の鳥  
花の雨赤き房ある絵解き棒  
金魚田に四隅ありけり走り梅雨

# 獅子座

山尾玉藻推薦

松井倫子

支へ遣りたき満開の八重桜  
一輪に一輪の影二輪草  
満開の牡丹のそびら昏れぬたり  
応援の中途に土筆摘みにけり

藤原冬人

飛び出でてまた花に入り囀れる  
波音のこの一村の朝桜  
幹を這ふ苔のさみどり初桜  
生き急ぐことさてやめて星隴

西畑敦子

花桃に女らのこゑ裏がへる  
降りしきる余花なる溪のおそろしき  
筍を探り草の香してきたる  
桜しべ降る自転車のシスターに

西村節子

ひよどりの桜散らせる醍醐かな  
山桜淵に散る他なかりけり  
花の昼退りて見たる揚屋かな  
ツアーバス着いて桜の褪せにけり

福本郁子

ヘリコプター近づいてきし大干潟  
詰襟の橋渡りくる百千鳥  
こぶし咲く六甲越えの魚屋道  
船入に舟もどりぬし花月夜

井上淳子

大和川の底搔かれぬる花曇  
木喰仏傾ぎ立ち在す花の昼  
玉垣をすこし外れし小鳥の巢  
鳥の巢を見付けしよりの肩の凝

伊勢きみこ

瑞垣を黄の初蝶の越えきたり  
春雨の回廊をゆく雅楽隊  
にはたづみをあまた残せり花の雨  
留守三日厨に出でし春蚊かな